

復興の姿

東北大学 災害科学国際研究所
准教授 平野勝也

人間が自然環境と関わることで風景が作られる。その風景には「なる風景」と「つくる風景」があると言われている。その風景が形作られる際に主導権を握っているのが自然環境すなわち風土にある場合は、「なる風景」となり、人間にある場合は「つくる風景」となると言い換えることができるだろう。例えば、微地形のままにうねる畦道を併せ持つ水田の景観は、「なる風景」であり、微地形と無縁に整形化された水田の景観は「つくる風景」になるということだ。ビニールハウスが立ち並ぶ景観であれば、さらに「つくる風景」色が強くなるだろう。つまり、これは程度問題でもある。ともあれ、「なる風景」は、自然と一体となった落ち着いた佇まいを見せてくれるのが常である。雪深い白川郷だから生まれた合掌造り。台風常襲地帯の沖縄だから生まれた高い石垣に囲われた家屋。水害常襲地帯の本曾三川下流地域だから生まれた水屋を持つ輪中集落。いずれも、風土に根ざした地域独自の「なる風景」が形作られている。一方で、谷に屹立したダムやダム湖、郊外の丘陵地をトップカットして出来上がった住宅団地、埋立地のテクノスケープなどは「つくる風景」の代表だろうか。「つくる風景」は、周辺環境と分離した完結した世界を構成してしまうのが常である。

風景における自然環境と人間との主導権のバランスは、近代機械文明によって、大きく変質した。大型の機械により、人間が近代化以前に比べてはるかに大きな力で、自然環境を改変する能力を得たのである。考えてみると、「なる風景」は近代化以前の風景ばかりであり、「つくる風景」は近代化以降の風景ばかりであるように思える。では、近代化以降に「なる風景」が形作られることはありえないのか？少なくとも近代化以前にも「つくる風景」は存在していた。世界的に見れば、パチカンの景観を代表に西欧の都市景観は「つくる風景」そのものであるし、万里の長城も「つくる風景」だろう。日本においても、城郭の風景は「つくる風景」であったにちがいない。そして、近代化以降にも「なる景観」は少なからずあるように思う。行政に頼らず、住民自ら道路の補修をする道普請で出来上がった風景などは、近代化以降の「なる風景」の典型かもしれない。

こうして考えると、「なる風景」と「つくる風景」を分けているものを捉えるには、民間のボトムアップ型の風景との関わりと、公権力や中央によるトップダウン型の風景の改変という観点も必要なのかもしれない。そうすると先に「つくる風景」の典型として挙げたビニールハウスが立ち並ぶ風景は、「つくる風景」ではなく「なる風景」ということになる。では、全国どこに行っても同じのバイパスの風景はどうだろうか。チェーン店の本社の思惑によりできた一方で、自然発生的に成立してしまった風景でもある。これは中央によって「つくられた風景」なのか、できてしまった「なる風景」なのか。あれこれ思索を巡らせてみても、答えはそう簡単に出そうにない。やはり、風景は奥が深く手強いのである。

* * *

2011年3月11日から5年が過ぎた。正直に言えば、節目という実感が無い。筆者が関わ

っている石巻も女川も、いまだ復興の真っ只中にあるからだ。そして、未だに多くの方が仮設住宅で暮らしている状況である。しかし、その一方で、復興に関わる多くの人の献身的な尽力で、着実に復興事業は進んできている。その努力をいつも目の当たりにしている人間としては、そうした地域のために尽力する人々を誇らしくさえ思う。

そうした尽力により着実に復興事業が進む中で、大きく地形を改変しながら自然環境と人間との新しい関わり方という形で新しい風景が固まりつつある。この連載でも紹介してきた「よくできた郊外住宅地」としての高台移転地。海と街を隔てる巨大防潮堤。そして、大規模な市街地の嵩上げ。もちろん主導権を握ったのは、津波という自然の力である。その凄惨な風景によって、人々は改めて自然を畏れ、自然と新しく折り合いをつけ直す、そんな住まい方の帰結が作られる新しい風景なのである。そうした意味において、この復興の風景は、「なる風景」なのかもしれない。津波を防ぐ防潮堤と大風から家を守る沖縄の石垣とは、自然との折り合いの中で出来上がる風景という点では同じなのである。防潮堤で海が見えなくなると批判されるが、その沖縄の家屋からも外は見えずらいし、輪中集落から川は決して見えないのだ。

しかしその一方で、公権力により近代機械文明としての大規模造成がなされているのもまた事実である。そういう意味においては、高台移転地も防潮堤も「つくる風景」でしかない。被災前の田老町の防潮堤も、津波という自然の脅威を感じさせつつも「つくる風景」であったように思う。奇しくも万里の長城と言われていたように、「なる風景」としてのスケールを超えた権力による風景という意味合いが強かったようにも思う。

もちろん、新しい風景が、人々に「なる風景」と認識されるのか、「つくる風景」と認識されるのかは、景観研究者以外にとっては大きな問題ではない。それを超えて、美しい佇まいであるとか、落ち着く場所であるとか、

また来なくなる場所であるとか、そうした魅力ある風景であることが大切で、そうすればそれが地域の愛着や誇りにも繋がっていくのだから。ただ、日本人は、例えば「つくる風景」の代表格、パリのシャンゼリゼ通りを見て、これは凄いと思っても、3日で飽きるのが関の山だろう。それほど、自然との共生に日本人の美意識はある。つまり、「つくる風景」では、しみじみと良いと思える街にはならないという懸念が拭えないのだ。しみじみと良いと思えることこそが、復興まちづくりに相応しいはずなのだから。街の主役は権力者ではない。そこに住まう人々なのである。その人々が、自分たちの生活を織りなして「なる風景」を積み重ねていくに相応しい場であればならないのだ。それが正しい復興の姿だと改めて思う。

* * *

2016年3月。あれから5年を経て、ようやく荒造成が終わりつつある石巻市雄勝中心街の工事現場の高台に関係者が集まった。標高20m。造成法面は地形に馴染む美しい曲面を描き見事に周囲の山に収まっている。迅速かつ丁寧な施工だ。そしてそこから見渡す雄勝湾は、湾口そしてその向こうの太平洋までが見通される雄勝随一の風景である。計算通りだ。いや、計算以上の美しさだとさえ思う。これが雄勝中心街の持つポテンシャルなのだ。安全性と雄勝の歴史、周辺景観との調和、道路、そして眺望。すべてを熟慮したこの高台が「つくる景観」と「なる景観」の二項対立を超えて、新しく、そして正しい復興の姿となるようにしなければならない。まだ、課題は山積している。思いを新たに、住民とともに復興をさらに進めていこう。眼前の雄勝随一の風景が、5年の奔走によって疲れの見えてきた関係者の背中を改めて押してくれている気がした。